

緊急レポート !! 野外現場情報



今年の野外現場は雨が多く、雨対策に迫られた現場が多かった印象です。スタッフは少なからず雨の準備をしていますが、お客さんの中には全く準備をしていない方も多く居たみたいです。熱中症対策が浸透してきている中「低体温症」になってしまったという例がありましたので今後の対策も踏まえ、ご紹介しましょう。

『低体温症』 (Hypothermia)

他の基礎疾患によらず、純粋に寒冷曝露を原因として中心体温(直腸温)が35°C以下に低下した病態。

自律的な体温調節の限界を超えて寒冷環境に曝され続けたり、何らかの原因で体温保持能力が低下したりすると、恒常体温の下限を下回るレベルまで体温が低下し、身体機能にさまざまな支障を生じる。この状態が低体温症である。



参考体温 (°C)	震え	意識	脈・呼吸	重症度	対応・処置
35-32	有	正常	良好	軽度	カロリー補給 水分補給 運動可 通信手段確保
32-28	低下/無	異常/低下	低下	中度	安静・水平 救助要請
28-24	無	無	さらに低下	高度	病院搬送 (救命センター等)
24-15	無	無	呼吸無し and 脈触れず	重度	外傷治療 心肺蘇生*

注: 震えが消失→軽度
意識無し→高度
呼吸無し・脈触れず→重度
加温: 体幹、首、鼓膜、鼓膜
接触面積を大きくして熱源を加える

*心肺蘇生を現場で行うかは議論の余地がある
-心肺蘇生行為が不整脈を誘発する恐れがある
-心肺蘇生行為が搬送を遅らせる
-心肺蘇生をしない・中止事例でも病院で蘇生できている例あり
-体温が回復しないと心肺蘇生の効果が得られない

IKAR: 国際山岳救助協議会勧告 1998
アラスカ: State of Alaska, Cold injuries Guideline 2003(revised 2005)を一部改変 訳・改変: UKDIMM 大塚和重

対処法



症状によって必要な対処法が異なる。特に中度以上の低体温症では、一般的な冷えに対する感覚で慌てて温めると、かえってレスキュー・デスを招く危険があるので注意を要する。例えば、急に手足を温めると、一気に心臓へ負担が掛かってショック状態に陥る可能性がある。また、上記の脳低温療法の要領で偶発的に、冷温での代謝低下によって脳が守られていた場合(「代謝の冷蔵庫」)、設備の整った病院への搬送前に現場で加温すると、脳の酸素・栄養消費が増大して供給不足に対処できなくなり脳死に至ることがある。アルコール飲料の摂取は、確かに一時的に体が温まるが、熱放射を増やしたり眠気を誘ったりし、余計に事態を悪化させる危険があるので避けるべきである。体の温まる甘い飲み物は効果的だが、意識がはっきりしていないと飲み物で溺死する危険性があるので、意識障害が在る者には飲ませてはいけない。



7月27日午後8時35分ごろ、某アイドルグループのコンサートが開かれていた東京都港区北青山の秩父宮ラグビー場で、観客らが相次いで体調不良を訴えた。東京消防庁によると、女性客数名が過呼吸や低体温症とみられる症状を訴え臨時救護所で手当てを受けた。うち17～26歳の女性19人が救急搬送されたが、意識はあり命に別条はないという。同行などによると、この日のコンサートは雷雨のため、午後7時半ごろに途中で中止となった。その後、来場者が相次いで体調不良を訴え救護所に運ばれたという。

[時事通信社] 引用

